新潟学校時代の舊夢後

特別
14
1919
780

176916

新潟學校時代の舊夢談

市島謙吉

はしがき

明治五六年頃同じく新潟の學校に机を共にして初めて西洋の學問をした頃の同窓は今極めて少ない。兎もするとその同窓が會して語り合つて見るといろ〳〵面白いこともあつて、今から考へれば殆んど隔世の感がある。自分は其頃十三四歳の少年であり、且つ在學の間が僅かに二、三年位の短期に過ぎなかつた爲めに、覺えてゐることも甚だ少なく、且つ少年の觀察であるから、その觀察も誠に覺束ない。幸ひにして當時同學の先輩が二、三人在京であつた頃いろ〳〵と前後の事を聞き糺したりなどしてみると、いろ〳〵の事が分つて來て、一通り其當時の事が話せるやうに思ふ。併しながら越後の最近の文明といふものは、此幼稚な學校が紀元をなしてゐるのである。其點より考ふれば、越後の文明史を他日編まんとするには、どうしても其時代の教育の有樣を缺いてはならぬ。然るに此時代のことは、多く忘れられて今は語る人なく、若し二三十年を經過したならば、遂に其時代の事實は全く湮滅に歸して、此文明紀元の材料が越後の歴史なり若くは教育の歴史なりに、全く缺ける虞があるであらうと思ふので自分は不束ながら蕪雜な談話ではあるが、取調べただけの事を書き現はして、教育史などを書く人の他日の參考

14
1919
780

38- 9468

に供したいと思ふ。返す〳〵も思ひ出づる儘を粗略に語るに過ぎないのだから、當時同學の人、若くはその頃學校に關係した人の眼に此の記事が觸れたなら、自分と志を同じふする人は、願くは材料を供給して、自分の足らざる處、誤れる處を補正して貰ひたい。

一、新潟に於ける英學の端緒

新潟が幕府の末路に開港場となつて、五港の一に數へられた結果、早くも維新以前新潟には、特に外國人に接する係員が置かれた。それは農學界の先輩として知られた津田仙氏の如き、その頃は外國係として、新潟に來てゐたこともある。新潟は五港の一に數へられたが、實はあまり開港場たる用を爲さなかつた。併し五港の一たる格として、外國人に對する設備を要したのである。此津田氏が新潟在住の頃、早く英學の端緒を開いて、津田氏を師として、五、六の人々は英學の研究を始めた。

斯樣な譯だから大政維新となつては、無論英學の機運は、此處に發せざるを得なかつた、自分の知つてゐる處に依れば、平松時厚といふ人が、知事に任せられたのは明治三年六月十九日であると思ふが、此頃よりして、英學が先づ知事の考へを以て計畫せられた樣に思ふ。

知事の事をいふに就て序でながら府縣の沿革を言はんに、今の新潟縣には、自分の鄕里北蒲原郡の水原に越後府が置かれ(明治元年六月)同年九月新潟府となり、更に二年二月に再び越後府が置かれ、更に同年二月二十二日に新潟縣が置かれ、更に同年七月二十七日に水原縣が置かれたといふ樣に、いろ〳〵沿革もあるが、明治三年六月十九日に今の新潟縣が置かれて、その時の知事に任せられた人が平松時厚

氏で、氏は元宮內省の權大亟であつた。

平松氏の考へを以て初めてブラウンといふ人を新潟へ聘した。是が新潟に英學の起る紀元とも謂ふべきものであらう。此ブラウンは其時分流布した英文典の著者で、所謂ブラウンの文典といふものは、その當時盛んに用ひられ、その爲めにブラウンといふ名を、人が知つてゐる樣なものであつた。斯人は一人の娘を伴ひ來つて、その娘もいくらか英語教授の手傳をした。

二、楠本縣令の激勵

此時分の學校の組織は如何なるものであつたか詳しく分らんが、何にしてもその時分の學校といふものは都にこそ相當のものがあつたが、地方には唯だ各所に家塾がいくつかあつた位なことで、所謂寺小屋跋扈の時代であつたから、此新たに起つた學校といふものも、先づ家塾の少しく纏つた位のものと觀て可からう。無論何々學校といふ樣な立派な名稱もなかつた。何處で英學を教へたか、その場所も自分は知らない位である。無論維新の當時に於ては英學を主にした譯でもなく、之に伴ふて漢學並に皇學などの學科も並立せられた譯である。是等は皆場所を異にして、殆んど同時に三學校が開かれたといふ有樣である。

漢學の方には何んな人が教師であつたか分らぬが、皇學の方は慥か加茂の小池內廣がその教頭らしい位置にゐた樣である。英學の方ではブラウンの外に、當時新潟縣の一等譯官で、中石得高といふ人が助教授といふ樣な格で、譯讀などは此人が受持つた樣に聞いてゐる。

その時分學生の數はどの位あつたか、之も詳しくは分らんが、何しても兵亂の揚句で人心も定まらぬ時代であるから、學校が開けたといふても誰も來り學ぶ者はない。殊に新潟は商人の多い所であるので、學問などに志す者は少なく、土地の者で入學したものは幾何もなかつた。そこで知事は據ろなく縣廳の役人の子弟などを勸誘し、是等の學科を修めしめた。だから、その數は二、三十人位に過ぎなかつた。此ブラウンの新潟にゐた間は二、三年位でもあつたらうか、實は折角外國人まで聘しながら、唯だ僅かに英學の萠芽を發したといふ位の事で、此人は去つてしまつた。が併し新潟の英學は、此時より始まつたといふてよろしい。

平松に代つて縣令となつた楠本正隆は誰も知つてゐる他日の衆議院議長で、大村藩士である。楠本は外務大亟より轉じて明治五年に新潟へ縣令となつて來たので、新潟縣の改革は全く斯の人の赴任後であるといふてよろしい。楠本は晩年は頗る不得要領の人と評せられたが、此時分は年も若く、仲々元氣壯んな時代で、赴任匆々あらゆる方面に大革新を試みた。例へば、斷髪令は出ても誰も結髪であつたのを髪を切らせると共に、不馴な帽子を戴かせるといふ樣な勢いで、僅かの間に社會の各方面に激烈な變化を與へた。勿論英學の如きは此人に依りて、非常な革新が圖られた。

是までは學校の組織も碌に纒つてゐなかつたものを、楠本に至りて大に規模を擴張して、初めて學校らしいものとなつた。その頃の學校の組織は主として慶應義塾に則つたと思はるゝ。校名は英學校と呼び、學長には二橋元長を擧げ、外人にはキングを聘し、教頭とも言ふべき位置には、縣廳の一等書記官であつた土取忠良といふ人を用ゐた。序でにいふが、その時分には新潟の如き開港場には、外國人と交渉

がある所から、官制に於て譯官といふものを置いた。それが一等より數等あつて、無論英學に通じた相當の人が來た譯である。斯樣な人は置かれたが縣廳には格別仕事がないので、いつもこれを學校の教授に充てた。乃で前述の如く平松時代には、學校はあつても僅かに二、三十名の生徒であつたのに顧みて、楠本は猛然起つて管内の巡回を試み、盛んに就學の奬勵をした。管内至る所大地主を集め時勢を論じて新學を學ぶの必要を說いた。楠本縣令は大地主に向つて『お前等は子供を生んでも、之を教育することを知らん、そんな事では禽獸と選ぶ所がない。』といふ樣な激語を發して盛んに勸誘した。

その當時は未だ官尊民卑の習風の殘つてゐた頃であるから、縣令樣御自身の御巡回御勸誘といふので、富豪の輩は恐縮して子弟を出すことを諾した。斯くいふ自分もその時の勸誘で、新潟へ出ることになつたのである。又その時の勸誘に依つて斷髪せしめられた。自分は斷髪の勵行だけは喜んで受けた。此頃油をつけてすき櫛にすかれて結髪することは日々の一大苦惱であつた。それを免るゝ譯であるから喜んで應じたけれども、英學を學ぶため新潟へ赴くことは躊躇した。と云ふのはその頃自分は漢學塾にあつて聊か漢學の趣味を感じた頃であつた。今日と違ひその時分の少年は、十二、三歳位でも無點の漢文を讀み、或は詩を作り、漢文を作るといふ位な程度であつたから、今日より見れば非常に進んだものである。自分は漸くにして漢學趣味を感じ、これから相當の力の付くことが、眼に見えてゐる時であるのに、時勢の必要とは言へ、茲で廢めてしまふことは生涯の損と考へて、餘り氣も進まなかつたが、何しても縣令は目星を打つて出せといふし、親も強いて勸めるので實は不本意ながら新潟へ赴いた樣な譯である。

三、楠本縣令の雄斷と學校の隆盛

以上は當時の自分一個の所懷であるが、却說縣令は新潟縣の極端たる岩船の村上まで赴いて、その時に一、二の人を村上に得た。それは今故人となつた、工學博士近藤虎五郎氏の父近藤金彌といふ人並に竹內政武の兩人である。此二人は共に村上藩の士族であつたが、縣令は此二人を選拔して學校の事務掛にと新潟へ伴ひ來つた。慥か近藤氏が前で、續いて竹內氏が來た樣である。

此二人の役目は、何といふたか忘れたが、今いふ幹事といふ樣な役目で、之が久しく學校の事務に從事した。斯樣な事で、一巡知事は勸誘を試みて、幾何か學生も來たが、併し未だ數が少かつた。乃で知事は斯んな事では、充分な敎育は出來兼ねると更に一大雄斷を試みた。それは私費で學生をとるといふ事では、唯だ富豪の子弟の來り學ぶ外、殆んど學生を得ることは出來ないから、學資なくして篤學のものを得るには、別な方法に據らねばならぬといふことよりして、その當時新潟縣の行政區劃が二十數大區に分れてゐたが、各區に命令を傳へて、必ず區費を以て、若干の學生を是非新潟へ出せといふ訓令を出した。是に於て各區とも若干の學生を選拔して、新潟へ送ることゝなり、此强制手段で、初めて相當の學生數を得ることとなつた。嘗て早稻田中學の敎頭をした今井鐵太郎氏の如きは其一人である。斯樣なことで結局隆盛の時代には、學生の數は四五百人位に達した。

是より先きブラウン已に去り、更に敎師を得る必要が起つたので、その時に聘せられた人は首藤隆三氏である。氏は早稻田大隈邸に早く英學を開講した尺振八門下の人で、國民黨代議士として、長く仙臺

より擧げられた人である。その首藤氏は當時は仲々立派な好男子で、能く黃八丈の羽織を着て學校へ出席するのを、吾々は子供心に記憶してゐる。此人に就ての奇談は、初め新潟へ着すると秋田屋といふ旅館へ泊つた。乃で縣廳から召狀の來たのを見ると、何日何時袴で出頭せよといふ事であつた。勿論英學者の事であるから袴の備などない、乃で據なく宿屋の主人に計ると、幸に義太夫語が來てゐるから、取敢ず其袴を借りて上げようといふと、先生無造作に、それで可いといふので、出頭の時刻は迫るし、之を着けることになつた。是は天鵞絨で造つて、金絲で大きな紋の附いてゐる、所謂藝人の袴である。それを無造作に着けて、出頭したので一笑を博した滑稽もある。も一つ記憶されてゐる話は、先生の學校に臨んだ時、第一の講義は、その時分頗る新しい普佛戰爭の事を萬國史から拔いて講じた。然るに先生は仙臺辯であるので、ナマリが餘り甚しく、流石に熱心な講義も誰一人分らなかつたさうである。

扨て又新たに開かれた學校の位地は最初は奉行所の官舍で、今現在警察署のある邊りかと思ふが、之が南二番といふ官舍であつた。それが間もなく狹隘を告げて、南八番といふ官舍へ移轉した。それは今の農工銀行の建つてゐる邊りである。此南八番も追々狹くなつて、遂には新町の町會所へ移轉した。それは今の稅務所のあたりである。何しても學校のために特に設けた場所でないから、間取りなどもおかしなものであつた。勿論疊を敷いた上に、テーブルや腰かけを置くといふ譯であつた。又そこに集つた學生も初めの頃は佩刀をして來るものもあるといふ樣な譯で、年輩なども極めて不同で、老いたるあり、子供もあるといふ樣な不揃のものであつた、遠方から來てゐる學生も少なからずあつたから、寄宿舍の設備もあつた。それ等の事は後に詳しく言ふ折もあるが、兎に角普通の日本座敷に、室の大小に從つて、

五人、十人雜居した。

四、變則よりも正則

首藤時代の教育方針は謂はゞ變則流であつて、譯讀が主であつた。唯だ書物さへ理解すればよいといふ風で、正則に音を正すといふことは二の次であつた。勿論首藤は教頭の地位であるから、多數の學生を此人が教へた譯でなく、多數の學生を教へる教師を寧ろ教へたのである。その一般學生を教へる教師は、學生の優等生から擧げて句讀師といふものを作つた。

句讀師といふものは、漢學塾の流れを汲んだ名前であるので、今日の人は一寸と妙に思ふ名前であるが、一時斯樣な名前が付いてゐたものが十人位あつたと思ふ。此句讀師が、首藤先生の教へを受けて、一般の學生には句讀師が教へるといふ譯である。而して句讀師は何を教はつたかといふに、當時は極めて程度の低いものであつて、グードリッチ氏の英國史などが最も六ヶ敷しいものゝうちであつた。無論此上級の學生といふものは、新潟の學校で育つたといふよりも、寧ろ外で相當の程度まで學んで、然る後新潟學校へ來た連中である。首藤が新潟學校へ留つたのは、二年許りであつたらうか、確か其後外國教師を聘した樣に思ふ。而してそれは英國人のキングといふ人であつた。

此の素性は能く分らぬが、如何にも人格の低い人で、又教へ方も餘り上手でなく、隨つて怒りつぽくて學生を叱りつけたりなどした所から、甚だ生徒の人望なく、久しく留る事が出來なかつた。此人に就て語るべき一珍事がある。或夜刺客がキングの家を襲ふたといふので、大騒ぎになつたことがある。だ

ん〳〵調べて見ると、拔刀でキングの寢室へ行つて、布團の上から切りつけたといふキング自身の話で、成程着てゐる布團には、刀で切り付けた跡が存してゐる。乃で大騒ぎとなつて、縣廳でも外人を刺殺するなどといふ事は、大變の事で、それが爲めに、兎もすると巨大な償金をとらるゝ事もあつた譯であるから、一時犯人を大に搜索した。誠に今から考へて見ると馬鹿々々しいと思ふのは、犯人搜索のため新潟全市の市民に二、三日間禁足を命じたことである。此調べのつかぬ間は一歩も外へ足を踏み出すことが出來ぬといふ事には、今は一笑を催す樣のことであるが、之が爲め市民は迷惑を感じた。乃で犯人は出ぬ、何んでもその時の評判では、キングが償金を貪るため、自分で芝居をしたらうといふので、遂には償金を出さず、有耶無耶の間に濟み、間もなくキングを解傭して、事は落着した。

キングに次いで聘せられた外人は、米人のエドワード・ゼームス・モスといふ人であつた。之が長く新潟に居り、此人の來た時代には、學校は最も繁榮を極めた。此モスといふ人は、横濱の新聞記者をした人で、學力は格別なかつたかも知れんが、教へ方は上手な人であつた。此モスが學校に聘せられて以來、學校も初めて正則の面目を保つて來た。

モスの新潟へ聘せられた時分、新潟縣廳へ一等書記官として來たのは、梅浦精一といふ人で、學校へ教鞭を執ることになつたが、無論教頭とも言ふべき位置で、最高級の學生は皆此人に教はつたのである。その後に亦同じく縣廳の六等譯官を勤めた高野爲隆といふ人も來て、教授を助けた。併し之は餘程後の事である。

モスの新潟へ來たのは、慥か明治六年の頃であつたと思ふ。その譯は此頃丁度金星が太陽を横斷して

日蝕を生じた時であることを記憶するが、モスが初めて日蝕を見るには、ガラスに鍋墨を塗つて見れば、あり〳〵と見えるといふことを敎へて皆々競ふて日蝕を見た事がある。今日では誰でもその位の事は知つてゐるが、當時は甚だ珍しく感じたのである。丁度此時分學校に充てられた町會所が市中の火事の類燒に罹つた爲め、假に何れかへ移轉することになつて、暫時廣小路上の勝樂寺へ移つた。此移つてゐた間が半年位のものであつたらうが、もう學校も大分大きくなつて來た譯で、茲に初めて學校新築の議が起つて、白山浦に元米廩の多く列んでゐる處を撰び、その米廩を潰して茲に初めて新築をやつた。その落成までは此勝樂寺にゐたのである。

五、本校の建築と分校の設置其他

今その勝樂寺時代の事を一つ二つ話して見ると、先づ本堂が寄宿生の讀書室でもあり、寢室でもあると云ふ鹽梅で、薄暗い廣い處に、四、五十の學生が机を列ねてゐたものである。乃で夜具の置場は、本堂の一段高い所、卽ち佛壇の下に、日中は累々として積まれてゐるといふ有樣で、その本堂と背中合せに屛風を立て廻して、そこに幹事室や事務室が置かれて、他の各室が講堂に充てられ、庫裡が食堂に充てられ、賄所は本堂の昇口の片側に假にバラック樣のものを作つて、其處で炊事をやつた。宛で戰にでも行つたやうな鹽梅で、頗る雜踏を極めた。併し斯樣な雜踏の間にも、敎授は常の如く進行してゐた。斯樣にしてゐるうちに、白山浦の新築も出來上つたので、茲へ移つたが、此の學校が出來てから初めて新潟學校といふ名稱を付けたのである。

今までは町會所や或は奉行の官舍などを學校に應用した譯であるのに、此度は特に手廣の建築をした譯であるから、茲に初めて堂々たる學校の面目を現はして前に比ぶれば實に月鼈の差を生じた。此時分に學校の徽章も定まり、旗にも學生の帽子にも鵞ペンを交叉したものが付いた。その時分の知事は楠本正隆で、學長は二橋元長、その下に校監といふものが置かれ、それが橋口正弘といふ人で、此人は楠本と同藩で矢張り大村藩の人であつた。幹事としては前にいふた近藤、竹内などが事務を執つたのである。そこで敎頭には梅浦精一といふ人があり、他の敎師としては、此時分縣官の出身地の關係より、大村藩から數多來てゐた。又松平正直といふ人が、福井の人で、縣廳の樞要の地位にゐた關係から、福井の人が澤山敎員に來てゐた。其他會津の人で來てゐた敎員もあるが、それ等の名は後でいふ折もあるであらうが、兎に角學校は、その時分無比の繁榮を來たし、學生の數が四五百にも達した。

是に於て新潟縣の二、三個所に分校を起すの議があつて、場所は新發田、長岡、柏崎に定められ、新潟に來り學ぶ能はざるものは、皆此分校に學ぶことゝなつた。

分校の事に就ては、詳しく知らぬが、併し幾何かの事は、後にいふ事にして、新潟學校(本校)のその頃の敎へ方などに就て、少しく御話するが、いふまでもなく、此時分の敎育の組織といふものは、丁度中學程度といふ形のものであつて、無論專門の學科を主とするものでなかつた。中學程度といふのであるから、專ら英語を主として傍ら洋算に力を込めたものである。

その組織は今日の我邦の中學校とは違つて、何れかと言へば、西洋の中學校をその儘日本へ持つて來たといふ風であつた。モスの時代となつては、盛んに正則の奬勵をしたので、斯人の敎へ方は、極めて

實際的であつて、日用の事柄を主に立てゝ書物を讀むに音を正すといふ事は勿論、綴字などには非常に重きを置いて、書取りの時間が多くあつた。又地理などを敎へるのにも、餘程實際的で、書物に就て學ばせる外に、講堂の壁に懸けてある世界地圖に就て、學生をそのまわりに集めて、一週何時間といふものは、必ず學生に地名を指點する樣に努めた。

モスといふ人は、書が仲々巧みであつて、筆跡が極めて美事であつた。隨つて習字にも重きを置いた。習字に附帶して、或上級には必ず手紙を練習させた。手紙は主に商用の手紙であつて、その奬勵の結果としては、仲々今日の中學よりも遙かによく歐文の手紙を書く事になつた。此人の敎へぶりをいふと、書取りなどの外は、總て自分のまわりに學生を立たせて置いて、綴字なり或は地圖の地名などを指點せしむるのであつた。その方法は立たせて、名を呼んで順番に問ふのであるが、先づ第一番にをるものよりかけて、それが答へないと順番に次へ々々と及び、答へたものが直ぐに go up（上へ上れ）といふて、答へることの出來なかつたものゝ上へ進むのである。斯樣の方法で問はれるのであるから、學生は皆勵むものである。而して一時間の終りにその日の席順が定まる譯で、敎師はそれを出席簿に控へ、それが學期終りの點數になるのである。

六、敎師に關するいろ〳〵

以上は主に正則の方面の事であるが、前述の敎頭の位置にある梅浦といふ人は、專ら上級の學生並に敎頭以下の敎師を二、三の組に分つて、譯讀を授けた。それは輪講の方法で敎へたのである。その時分

どんなものを輪講の書物としたかといふと、今では廢つたが、ウェランドの倫理書、經濟書などが、その時分流行で、是等が最高級の本であつた。尙ほその外にギゾーの文明史、ミルの經濟書、クワッケンボスの究理書などもあつた。梅浦敎頭は輪講の外に、自ら文章を書いて（時文）それを英文に譯させる事などもやり、或は又外國の新聞の或部分を分割して、之を各々に飜譯させるといふ事を努めた。而してその各々から出した飜譯を纏めて、書き直す人がその級にあつた。それは後に實業界に入つた萩原源太郎氏が書を能く書き、又達者に書くといふ處から、此人が淸書を擔當した。

生徒の譯文を梅浦敎頭が筆を入れた、扨て又それが纏つて何うなるかといふと、當時の新聞は小型の未だ幼稚の域にあつたが、之に寄稿することが、例であつた。それが爲めに自分などの譯したものが、月に二度や三度新聞に現はるゝといふ譯で、ひどく奬勵になつた樣に思ふ。今日に於ては、新聞に文章を載せるといふ事は、誰でもやる事で、餘り名譽とも思はない事であるが、その時分は自分の筆になつたものが、新聞に載るといふことは、學生として大いに面目に思つたものである。隨つてそれに載せるといふ事が奬勵にもなり、又新聞社の爲めにもなつたものである。又梅浦敎頭の書いた文章を英文に飜譯するのは、餘程上級者中の少數者のやつた事である。今でも覺えてゐるが、或時の文章は「民選議院設置の議」といふ長文が、課題に出た事を記憶してゐる。

で、その時分の月謝、寄宿舍費は、幾何であつたかといふに、是も多少の變遷はあつたかも知れぬが、今記憶してゐるのは、何でも南八番時代の月謝が金一朱卽十二錢五厘であつて、寄宿舍費は二圓五十錢であつたやうに思ふ。十二錢五厘などゝ言へば、大層安いやうだが、實は今日の五倍と見れば矢張

り相當のものであつたに違いない。乃で町會所、南八番時代には前述の句讀師といふものが置かれて、幾何かの俸給を受けたものである。例へば十圓位の俸給を受くべきものが、自分が教はるといふ方から、三圓許りを引いて七圓位の俸給を受けて居るといふ樣なものであつた。何でも新潟學校となる以前の教頭以下の句讀師などは、俸給の最も高いもので、十圓位のものに過ぎなかつた樣である。新潟學校と改るに及んでは、句讀師の名も廢せられて、何といふ名が付いてゐたか忘れたが、謂はゞ今日の教員といふ樣な名義で、諸方から多くの人達が聘せられて、十數人の教員が備はつた。是等は矢張り二、三の取除けの外は、皆教頭に就て一面には教へを受けた。その取除けといふのは、例へば數學の教師の如きは、唯自分は教師を務めるといふだけで、教へを受けなかつたのである。

教師には何んな人が來たかといふに、前にも言つた通り、知事が大村藩であるといふ關係から、大村から土屋廣次といふ人が來てゐた。それからその時分の縣の知事の次の人で、松平正直といふ人が來てゐた關係から、その人は福井であるところから、松平正秀、松平誠、津田東、松原某などいふ人も來てゐた。それから會津の人で、萩一雄、それから福井から武藤鳳六、それから之も確か福井の人であつたと思ふが、數學の教師が高橋貫一、それから長岡からは、佐野洪藏などいふ人が來てゐた。遡つて新潟學校となる以前の所謂句讀師といふものは、何んな人であつたかといふに、中川忠太郎、石澤兵吾、長谷川寛治等の人々であつて、是等の中には、新潟學校となつても、尙ほ繼續して所謂助教授といふ樣な格で教務に與つた人もある。

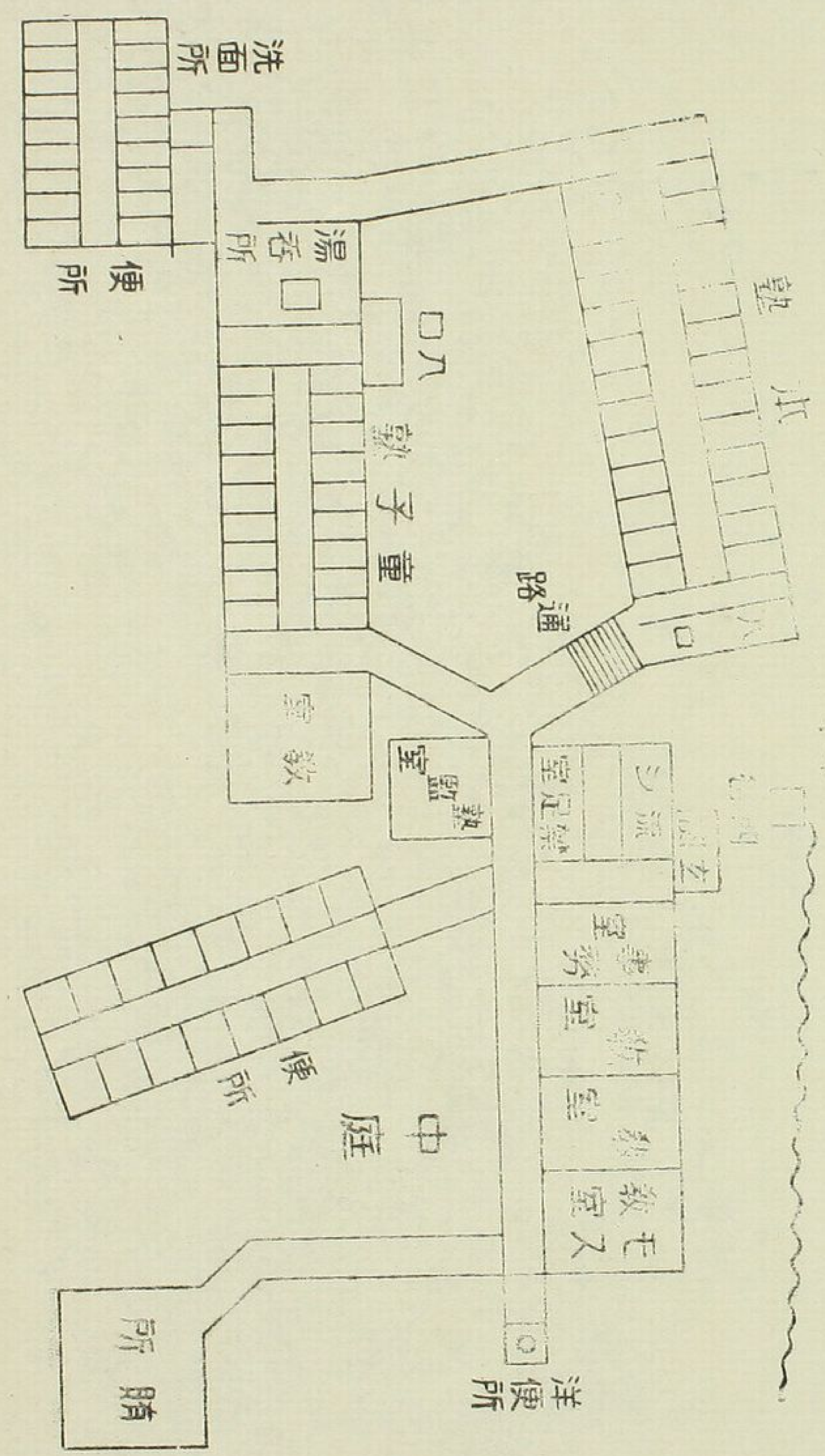
七、久保氏の談話

それから分校では新發田に久保扶桑氏、長岡柏崎に小島銑三郎、藤井三郎、此人々が教頭になつて來たのであるが、此二人の中熟れが柏崎であり、熟れが長岡であるといふ事は、一寸自分には覺えがない。兎に角是等の人々が聘せられて來たのである。

乃で長岡から出た上級生として知られてゐるのは、故人となつた波多野傳三郎氏、盲啞學校長であつた小西信八氏などである。

久保氏が新發田へ來て教頭になつた頃の事に就て、いつぞや久保氏に面會した折に直接聞いて見ると、久保氏は次の如き興味ある話をした。「自分は實は東京にゐて北海道へ出懸けて、何か一つ事業をやりたいと云ふ考へで、自分の後の事は皆岡山兼吉氏に托して、僅か許りの旅費を以て北海道を志して東京を發した。その時分北海道へ行くには、越後を經て行く方が近道であつたので、先づ越後を志して東京を發すると、前橋に着き圖らず病氣に罹つて、多くもない旅費が、殆んど盡くるに垂んとして病氣が癒つて、やつとの事に新潟へ着した時は、囊中僅かに金一朱を餘すのみであつた。その時分新潟の師範學校に平井と云ふ友人があつて、それを便つて相談をしやうと訪ねて見ると、生憎その日は不在であつた、據ろなく何處かに旅宿を求めて、懷にある全部の金を茶代として、抛り出してしまつた。處で全く無一物となつてしまつたが、幸ひに翌日平井に會つて見ると、平井の云ふには、北海道へ行くなら敢て止める譯ではないが、兎も角出懸けるに就ては、少しは金を持つて行かねばなるまいから、先づ基礎を

作る爲め、暫く越後に足を止めては何うかといふ。そしてその積りなら、新潟學校へ世話をするといふので、自分も已むを得ず、その氣になつて梅浦の世話で、新發田の分校の敎頭になる事となつた。その時分自分は役人といふ資格でなく、所謂御用掛りといふ役で、縣廳との條約の如きは宛かも外國人を傭ふ場合と同じ樣な約束のとりかわせをして、そこで新發田分校の敎務に與つた。新發田には二年許りも足を止めたであらうと思ふ。さうすると楠本が東京へ去つて、その後に永山盛輝といふ人が知事になつて來てから、自分は縣廳へ呼出されて、出頭して見ると、永山は脇差などを脇挾んで奉書に書いた辭令書を芝居などにある樣に、雙手に高く捧げて、恭々しく自分に渡したのを卽座に開いて見ると、是は自分を役人扱ひにする事に改めてイクラか俸給を增して、柏崎の分校へ轉任せしむる辭令であつた。全體自分は役人になるつもりではないので、初めもそれが爲め外人と同じ樣な條約をとりかわした譯であるのに、豫め相談もなく、突然役人扱にする事に對して癪に障つたから、辭令書を見ると直ぐに異議を稱へて、斯んな事は御免を蒙ると言ひ出したら、わきに座してゐた田沼がまあ〳〵兎に角御受けなさいと言つて、頻りに宥めた。併し自分はその時から厭になつて遂に辭することに決心した。新發田を辭するに當つて、その時分自分が世話した學生の中に自分の宗家の子弟（佐藤伊左衞門、須貝四平）や白勢家の子弟（白勢和一郎）もあつて、此兩富豪が私に向つて、何うか私共で貴方を世話するから長く越後に止つて貰ひたいといふ勸告もあり、自分も一時はその氣になつたが、東京の友人連が歸京を勸めるので、遂に引上げる事になつた。」斯樣な話で、幾何かその當時の模樣も察せられる。



八、當時同窓の人々

當時の新潟學校の構造に就ては、何れ新潟縣廳にその圖は殘つてゐやうが、今は他にその圖を求めても、絶對に之を得る事が出來ぬ。併し話の序でに大體何んな風なものであつたかを粗雜ながら玆に現はして見たいと思ふ。舊い事であるから、とても正確に現はす事などは、思ひも寄らぬが、自分の記憶を試みに現してみれば、凡そ前頁の圖の如きものであつた。

即ち中央に大きな入口があつて、一方は講堂、一方は寄宿舍といふ大體の構造で、講堂の有樣は今の小學校の講堂と趣きは變つてゐない。寄宿舍は廊下を中央にとつて、兩側に三人乃至五人を容るゝ位な室が凡そ五十位もあつたであつたであらうが、丁度今の病院の病室の如き趣があつた。此寄宿舍に學生の寢泊りしてゐた事は勿論、遠方から來てゐる教員も、亦寄宿舍にゐたものであつて、その人達は房長といふ樣な有樣で、他の寄宿生を監督してゐた。自分兄弟は未だ南八番頃には、新潟の醫界に名聲ある長谷川寛二氏の室にをり、それから會津の人の萩一雄氏の室にも居り、新潟學校時代には曾て刈羽の郡長たりし石澤兵吾といふ人の室にゐた事もあるが、是等の人々は年配も學問も先輩であり、單に房長として監督したといふのみでなく、頗る親切に學問其他の事に就て指導してくれたのを自分は感謝せざるを得ない。

新潟學校時代に如何なる人が、就學せるかを考へるも今に於て興味ある事であるが、唯遺憾な事には、その時分の名簿が殆んどなくなつてゐる爲めに、記憶してゐる人々の名が甚だ少ない。唯思出づる

儘に、人々の名を擧げて見ると、理學博士藤澤利喜太郎氏なども學校の創始時代にゐたのであるが、是はずつと舊いので自分はその頃の事は知らない。自分の競爭者として、今猶記憶してゐるのは、宮內省の侍醫たりし桂秀馬、それから横場の筆工の子である古田鎭三、此兩人は極めて秀才であつて、常に自分と首席を爭ふた人々である。それから大竹貫一氏、高橋邦三氏、小林善四郎氏、內藤久寛氏、廣瀨吉彌氏是等の人々も矢張りその時代に居た。新潟市の實業家中には、鍵富德次郎、栗林貞吉、荒川才二、小山長作是等の人々も矢張り同時にゐたのであるが、勿論級は皆それ〳〵異つてゐた。未だ幾人か記憶してゐるが、どうも今となつては、姓を覺えてゐても名を忘れたり、名を覺えてゐても姓を忘れたりして、玆に申述べることは甚だ困難である。曾て東京にその時分の同窓會を催したことがあつた。それは已に十數年前の既往になつたが、偶々今の內務省技師の近藤虎五郎君の嚴父、金彌老人（當時の幹事）の出京せられたのを機として、今の楠本男爵梅浦精一氏などを招いて、二十人許りの人々が會合したことがあつた。何にしても三十年振りで、殆んど始めて出逢ふ樣な譯であるから、昔は互に知り合つてゐる面々も、互に出逢つてみると、殆んど互に相知らぬといふ有樣であつて、自分は比較的此等の人々と度々會つてゐる樣な事から、紹介者となつて、是は誰、是は誰といつて紹介して見ても、その引合せられた人々は、殆んど呆然として暫く顏を諦視して、漸くにして理解が付き、成程それに違ひないといふ有樣で、甚だ奇觀を呈した。何うも此時分の人達は多く集合するといふ事は、今日に於ては甚だ困難である。その集會の席にいろ〳〵な懷舊談が出て、甚だ興味を感じたが、考へて見ると、隨分舊いことであつて、近藤博士などは、吾々よりも遙かに年配若く、その時分は未だ每晚寄宿舍に嚴父の近藤老人に

抱かれて寢てゐた小兒であつたなど云ふ舊夢談も起つて、皆一度は近藤老人に叱られた面々であるから、それ等の失敗談を口々に語り出で、打興じた事がある。

九、その後の新潟學校

明治八年に至つて楠本縣令は東京府知事に轉じ、梅浦敎頭は內務省の勸業寮に轉じた。唯だ外國人モスは九年頃まで止つてゐた樣である。梅浦の去つた後は、會津人で阪井正義といふ人が來たが、此人は學殖足らざる爲め、間もなく排斥せられて去り、それに代り縣廳に一等譯官となつて來て、學校の敎頭を兼ねた人は工藤助作といふ人で、之は確か弘前の人であつた。無論永山知事の時代である。之より先き確か明治六年と思ふが、全國に文部省が英語學校を起すといふ事となつて、全國を六大學區に分ち、六ヶ所に英語學校を置かれたが、新潟にも亦置かれた。是に於て二つの學校が竝立する事となつて、新潟學校からも幾何かの學生が英語學校の方へ轉じた。併し新潟學校は依然として成立してゐたのである。唯だ新潟學校が追々年を經るに從つて、多少の變化を生じた譯は、當時遊學してゐた連中の中に、子供計りでなく大分年配の進んでゐた人々も多かつたので、學問の方針に關して一時議論が沸騰した。その要領は如何といふに、唯だ西洋の語學許り研究してゐるのでは、身を立てるの方法としては不完全である。何等か職業を得る學問をするに非ざれば、將來活路を得るに困難であるから、宜しく學校に一、二の專門の學科を置くべしと斯樣な議論が一方に起り、之に對して專門の學科は、各々志す處に依つて東京に至りて學ぶべし、此學校は專門の學科を修むる階梯にして置けば可なりといふ二種の議論があつて、

互に鬪つた結果、學校でも考へ、結局兩方の議論を折衷して、玆に二つの學科を分けて置く事になつた。それは在來の專ら語學を敎へるの學科を講習科と名づけ、專門の學科の方面は、百工化學といふものを起した。これが學校の一大變革であつて、此百工化學を起す爲め、經營上人を聘したが、其人は美濃の出身で村橋次郎といふ人であつた。此人は經營が一通り終ると東京に去り、後ち中川謙次郎氏が來て、その敎頭といふ位置にゐた樣である。講習科の方面には、最初大石某といふ人が來たやうである。それと殆んど同時に、故人文學博士三宅米吉氏も講習科の敎員に來てゐた事がある。斯樣な學科を改めて以來の事は、自分は殆んど知らぬ。自分は明治八年に新潟學校を辭して上京した譯であるから、その後の事は一切知らんが、何んでも一年位後に學校は、遂に英語學校と合併せられたかと思ふ。

新潟學校の前後に關する自分の知る處は、此の如きに過ぎない。勿論幼少時代の記憶でもあり、又在京者で此時分の事を知つてゐる人も甚だ少ない譯であるから、實は甚だ覺束ない談話であるが、前述の通り何うか自分の足らざる處や或は誤れる所は充分補つて貰ひたいものである。（完）